朝夷巡嶋記 第三編 四

イ13
939
~~39~~14

門 イ13
939
39

朝東巡嶋記全傳第三編巻之四

東都　曲亭主人編輯

中輯第廿七

鸞鳳の日蔭花　副将の晦之月

信夫荘司元晴ハその日より義邦の動静云為を試るゝ辞寡しく信あり。才高しゝ那かし。加以その容止美麗ふしゝ傳多く汚べくもあらねば。ゆゑよふく愛敬いく程もなく廣光ゝ媒妁ゝ娶くその孫女笹姫を義邦ゝ妻けりゝされば。この笹姫と実ハ前伊豫守九郎判官義経の息女ゝ往時文治三年高館の城中ゆく生れぬひ兒かくてあれば五年閏四月晦日泰衡ゝ野心ゝより高館の城攻られゝと兒判官なづ妻子を刺殺しゝその身も自殺しゝ程ゝ元晴竊ゝ件の姫うゝを救ひて。

幽かに隠しく養育し筐姫と名つけたり。今茲八二八の春秋あり。紀現義経の像見とるるめこれ下ちらのこあるべき筐の名さへ負ぜしなるべし。いかへ同姓を要らぞとは本文あるども後世いさろ沙汰よ及ぶぞ義都と筐姫八正し紀後弟どちかく共よ日蔭の花ぞもその才色八劣らぞ優さぞ。終ゆ世ゆも出ぬん時ゆもあひぬんとその方ざゐの人八やり。されども義邦八只顧よ辞退しく且くうけ引ざうしかど元晴頻ようち歎て某八子共駆もちくれども不幸ゆしく皆世を早うし剰判官よ進ぜる。嗣信八八嶋壇浦の戦ひよ陣歿し忠信八吉野よ留り更よ潜びく都よ上りいく程もなく自殺しく兄弟共よ忠臣の名をのこ遺を故郷。ゆうう二人の婦八尼よありて越後國よ赴紀出雲崎よ草を締く年来行ひ澄しゆ是え去こ歳打ぐ紀く往生の素懐を遂ぐう。作者云越後の出雲崎よ。

尼瀬町とはいふ処あり。こは嗣信忠信が後家の尼あくよ来りて住し処ゑとのみ一説よ佐藤庄司元晴が後家ありとはいへど寺泊よ嗣信忠信が石塔碑あるべいはれあれ。とう古迹ゑかりて尼瀬の名をば負せしなるべし。某今八妻もなく子もなく嫁よさへ捨られうう誰ぞ後をとはん犬馬の齢七十餘歳惜こともあるぬ命ゆもこども心よかるえ姫うへのこ昔もかくゆ赫奕姫が親ゆ翁が情願只ゆのすゑと唧ゑくく口説しぐ義邦八元晴が誠心を感佩し竟よ推辞ようくて。この婚縁を結べるへかくく婚礼の式をどもようぐ潜びやうよ支終りて。その三日の壽紀よ元晴八腹心の老黨水草十郎昌甫城戸三郎守詮ホを集會く酒ようくしうけ夜足利左馬介義兼の軍兵催促状到来せその略よ云反逆人藤原泰衡が残黨大河太郎兼任が子經任字修羅五郎先亡の餘類を聚めく厨川の古城よ蜂起し頻ゆ進ぐ平泉の柵よ縁るよ近属そのものえあり因茲義兼鎌倉殿頼家の

武命を蒙り征東の摠大将となり刀野時夏副将となり則九月晦日に足利を
進發し上野下野の軍兵数千騎を引卒して既に白河の関を踰ぬ。
速案内の軍兵を駈催し路次まで出迎ふべ旨者也とぞ書たりける元晴
讀訖て眉を顰めこの足利左典厩ハ歴々たる源氏なれ且執權時政の
聟なれば追討の大将なるべし。時夏何ぞ副将軍に拜せ
られる長生もなれば多くの珎支をもなくしのぶれば此度の合戰ハ
果敢なくしかるべくんば絶嚴命なれば時夏ゞ下に立んや傍痛し
と咳て聽て答書をもて老病に歩行自由なしと称し次の日城戸
三郎守詮を大将として軍兵三百騎を義兼の陣所へ遣しこれより義邦
廣光をおは深く潛しうる程に刀野太郎時夏ハ曩に執權時政の
内意を得て竊に歓び恩赦遲しと俟ける三伏の暑に日ハ早晩

秋の初風に立うれども沙汰もなし。あまりの心もとなさに又一計を匠
出して腹心の若黨矢塚達六といふものを鎌倉へ遣し義邦義秀并平
等ものびくに陸奥に赴て平泉の搦に入まり経任重くこれを用ひて民の
心を攪し六郡の愚民属従ひて既に大事に及びぬと流言をせうゆる
件の矢塚達六ハ年来時夏に使れて奸智あるものなれば并平がをこだりて
おのづから出頭して刀野ゞ家の宰ありかり程に時政ハ件の流言を傳
聞て大うろたえ駭騒て且その始終を慮るに彼義邦ハ蒲殿の子といへば
経任これを主ふして義經の故事に倣ひ愚民ホを釣るあるべし又朝夷と
奴ハ万夫不當の勇ありと世に加るに并平ホ此彼經任を資あべ虎に
翼を添るに就中憎きも憎飽ざるハ并平こ這奴ハ總角の比より七ツ
仕へく恩に負て又時夏に從もれば行く程もなく義に背くり彼奴を

生拘りて由井濱より斬梟ぜられ世の人よ笑ひ憎むべしくと敦圓つ。
聽く支の趣を執達して足利義兼を追討の總大將とし刀野太郎
時夏を召還しく義邦謀叛の告訴を誉めその勸賞として此度の
副將軍に拜任しその本領安堵のみ及新恩加增せられるハ軍功よりも
べとて馬物の具を牽こうげる時夏竟より謀課せく志願一朝より成就せ
く歡喜雀躍して恩を謝し且く執權の館より止宿して時政父子より贈る
と餞に狗より興あるべ七月下旬より足利へ立ちへるく軍議の席より預り
けりこの頃より義兼秋暑より冒されく八月もいづくより送りつ上野
下野の國へハ豫く御教書を下して軍旅の支度整へども。
大將の病著よりく支のとろくして九月も日數徒らしくべ。
時政ちく催促をされよりて義兼ハいまだ全く愈されども病を推て。

その晦日より下野を進幾し白河よりぞ進こる軍兵無慮三千餘騎副
將軍時夏ハと華やかなる物具して太逞し駒馬に乘り一千餘騎を引卒
ちく先陣より拍せらるの為体いやしく四下を拂ふ見えよりかく義兼ハ
日よりくと五六里ばかり後れて來る味方を待つけ十月八日より國府の城
宮城郡より來著して両三日人馬の足を休めあく地理を問敵の強弱を
考へどもる程より信夫莊司元晴が老黨城戸三郎守詮より會して元晴が
口狀を述しくべ義兼則守詮より鄉導させく遥より江刺郡へ向せ
鎮守府のかとりある膽澤の神の社頭より到るく祈願のあるかく要害の
地より陣しこの処膽澤郡と境をおべく經任が盾籠る平泉の柵より
遠くべ當下義兼ハ諸將を聚會く軍議を凝らし賊のうち寄せを
俟く戰より利あらん欤進こそ攻るより利あらん欤と支の異見を問れしべ。

時夏騎く
守詮が
軍議を
折く

足利方兼

高階兵衛

刈田重四

時夏

矢塚達六

城戸守詮

寄せんとせんとのあり。進んで攻んとせんとのあり。衆議區々なり。一決せず。義兼遥に坐よりて城戸三郎を呼近つけて汝は當國の案内なり攻るとも守るとも孰か利あらんまれ。修羅五郎經任は幻術あり。雲を呼び霧を起し人の耳目を迷はすといへり。こは虚言歟実歟と問れて守詮さいひ兼任が撃れし比經任甫十五歳岩鷲山より逃かれて有一日異人より邂逅し左道の術を習ふこと三年是より里に出て幻術をもて愚民を迷し竟に逆乱をあらすといへり。又經任は四人の賊将あり。神井猛虎字八鬼六鐵盾重連字八矢藤五珎浦方相字五十五六。蘇途暴道字八鵜東二須弥の四天に擬る兇悪無慙の癖者なり。この他賊将多くあるべし。されども烏合の悪黨陣法を知らず御陣を些退けば八幡林を前に當るに軍兵を隠し置く賊の来撃を引つけ軽く戦ふく敵を驕らせ伏兵をもて後陣より出て攻くまはり攻べ經任の幻術も行はれず暇なく一挙して擒にすべし急に柵を攻させば賊徒脱ぐるを力を勤せ志を同くして防禦その際なるときは速に落べし寄せの退屈するを窺ひ或は夜撃或は朝懸出没不測の手段を竭さば御方の勝利おのづから。徒に時日を送りて兵粮乏くなることあらば。大変なるべしと憚る所もなく答へて義兼頻るようち点頭後ん氣色なく左右を佶と見られば野太郎声を激し守詮汝何物かれば無用の舌を動し陣中に敵の勇を説のは大将の忌ところ平家富士沼の敗北も彼齊藤実盛が無用の辯にあらずと揣る經任幻術ありとはいへども原是小児の戯れのみ大兵下りて城に臨まば身を脱るに暇なん然るを況幻術をや既に武命を奉て二毛の大軍當國の御方をなくこの廷

あぐく寄せあぐるいあぐこ城を攻めこしく陣を移し退うべ支よ臨うく不吉に時夏不肖なれども副将軍を辱をいうぞう田舎侍の臆説よ少懼しく賊の英氣をあなどをせんや傍痛しと冷笑し守註へその言の行れぐらをさく遂よ再びあいつぞ面目を失ひく舊の席よ退けば時夏ハ摠大将義兼に會釈あくあれ某ぐ一隊をもて柵を乗取いん本陣を進られく御方の英氣を資ぬぐ勝利疑ひなしとゆ義兼ハ執權の由縁の故よこの年来扶持しる時夏が恩免を蒙うさく副将軍よ拜任せし鎌倉より退くしと時弩の内意あり渠初陣のうあれば貴所の扶助よよりて功名を取りかさくんこのあらをぬくぬるべしと消息よせしべともかくもしく時夏ぶ軍功あらせんとふあみく今その大言をせく莞爾とうち笑を勇ありぬ哉よ計略とふもいあぐ賊の柵をうを矢の一條も射うけぜしそこの処を退くべ賊の英氣を倍ものこ義兼ハ後陣よ續ん攻一攻くあるべしと愉く許せしくべ時夏ハ欣然としておのが陣よ立うへり軍兵の部しそこや真先よ騎せばその隊の士卒一千餘騎隊伍を整へ旗を進め平泉の柵へ寄せる程よ摠大将義兼も二千餘騎を三隊よ備へ徐よ馬を進めうり是より先よ經任ハ追討の大将義兼時夏三千餘騎を引卒しく。

こや江刺まで推寄せ来つ鎮守府よ屯しうと注進擬の歯を挽ども些も騒ぜ頷くのこ股肱の賊将神井恩六鐵宿矢藤五ふを召近つけ義兼ハ名家の子孫支よ熟くる老黨も多かべく且況重ねく思慮ありと宣けハ。侮りぐ紀歇るあり但時夏ハ黄雀のこ貪り啄く飽くを忘ぐ曝されて早蠅五頭平をもて渠を引入させられども五頭平果敢をく生拘られく。遂よそのう成らぐ紀されば今度の戦よ時夏が副将なるハ則味方の幸こ

まれ既に謀を設置つ鬼六八五百騎をねく泉川のこなたに陣して敵の
川を渉せをえんべこの中流に到るを撃又矢藤五八三百餘騎をねて霜ま
川上の趣旨暗号を候く堰留あるる堤を一度に断く落せよ敵の
疑めく泉川を渉さべ八罵り辱しめく怒せよこの他の進退機に臨こ
変に應して欺引せ時夏を生拘るべし渠をぞこ擒に せ義兼を敗ん
と石に卵を擲より易うよく せよかと説示せべ鬼六矢藤五須掌し
あのく賊兵をねく柵をそうする程に力野太郎時夏が一軍泉川の上に
到く前面を信とえまくせべ賊兵徳に四五百騎河原面のうち出そう
時夏うち見く冷笑ひられべをせくとうるとへ異めく賊いくく小勢
なるを河水も亦浅やうれべ膝の上を過べくべ衆皆渉せと下知せれべ
城戸三郎諫めくいかう賊八小勢にあれども戦ひを持うへ別に謀る

ありべし且この川八恒に水高く流急うり況や雨後のことなれべ水変の
増べきに俄頃に浅瀬にありうるへ不審し後陣へ謀ど合させて後にそと
いいせもあへべ時夏呵くと冷笑ひ和屡へいくく臆しうるれへ其許の
郷導をこのあべ如此おべ後陣に退りて大将に注進せよとくく焦燥
めで守詮へる勢をねく軽くく後陣に立うへう云くのをを告しうべ
義兼実く冒を顰め守詮ど異見さもむるべし時夏り血氣に来
ちく川を渉さべ過失あくん速に禁めよとて老黨嶺田重正を遣しく
時夏にそのこうを拒させ又城戸守詮に軍兵三百騎をすし加え敵の堰
うることもやとて遥に川上へ遣しうかうし程に重正八馬を先陣に乗
走らしく時夏に對面し大将の肯を述く叮嚀に制めしべ時夏八事ひ
なく前面を睨く扣う賊将鬼六猛虎八寄るの川を渉さべ所を

足く声高紀ものを罵りてかゝるよ罵らせ或ハ馬よりもう立く沙石の上よ臥もおう或ハ尻をこゝ〳〵向く打て紀つ笑ふもあり傷若無人の為体よ時夏ハ怒よ堪ず介殿（左馬介義兼）あまりよ遠慮しく辱らること如し烏合無懲の逆賊おゞいるぞくの謀をきゞ〳〵べき彼撃散らせ。と敦国つ真先よ馬を進めく川へ颯と乗入れう相模の早雄の軍兵四五百騎食後をゝと川を渉ゞ〳〵よりゆゞ浅うゝれば後れしものも遅足ゞ〳〵く水中よまう立う浩紀よ敵の陣後よ一声の鏑音響なく一道の烽燧内紀沖る程ゝれ川上より断落ゞ水忽然と激流して其の疾ゝ矢のごく人馬の足を衝倒せば中流よ漂へる五百餘人ハ推流され先よ進し兵ハ辛〳〵く向の河原よ跋登るゝ二百餘人待儲る敵兵よ射倒さゝ砍伏られ生きかへるハゝうけつゝ時夏ハ馬の

平首よ抱紀著役卒矢塚達六ハ主の馬の尾をゝよかゝまゝく流さるゝを十町ばうり敵の抓子棒よ懸られく主役共よ阿容ゝと沙上よ引上られ軈てゞ索を掛られけう先陣墓なく敗れう。ゝゝ後陣へゝえしゞ義兼これを救んゝく頻よ諸軍を進めしかも刀野主役ハ生拘られ急流溢漬りて渉をべくもあらざれば只管空箭を射くるのゝ亦せんべハ当下神井息六ハ鞭をゝて義兼を両三ゝび〳〵招けば衆賊咄と笑ひて勝閧を揚生拘を牽立く徐ゝと退く程よ寄るの士卒ハ眼を睜り拳を捺りて眺くもう義兼怒氣胸よ満くゝぞも大息吻紀。時夏漫よ血氣よ早りて軍令を用ひゞ味方の士卒を駄撃せその身も擒よせられうれり〳〵刀野を救ひ奪ゞ北俯屈る何とうふべき。この川堰る水あゝゝ落ることも速あゝん日あゝゞ柵を攻破りて時夏ハ

敵ふべし。うつてや血氣の若武者よ徳れ犯と後悔しつく鎮守府まで退く程よ城戸三郎守詮ハおぐ川上よ到らもども中途ふして水岌の戦項墻よ入りく敵の謀よ陥つん今ハやくとも甲斐ふし

とて。其処より陣所へ還りろて。それハさておき。あらごらつるくの。うめねの素下某生再説修羅五郎経任ハ神井鬼六鐵盾矢藤五ホゞ注進遅しと俟程よ果して鬼六猛虎ハ時夏主従を擒ふ。矢藤五と共よ帰陣して勝軍の支の趣巨細よ告しく経任ふく歓びく西人と労ひ迺衣裳を更く牡丹花の間よ出しく経任ハ四天王珎浦五十五六蘇塗鵜東二神井鬼六鐵盾矢藤五この他の賊将十餘人さゐくる身甲して大刀を帯戟を執りその左右よ侍坐しろり又庭上ふハ器械を樹立弓箭を取る賊兵二百人齊くとして隊伍を乱さゞ。整くとして列をかせり。かくろく五七人の賊卒ホ時夏主従を縛めく。大床の下よ牽居ろう経任ハ結と足く渠ハ寄ふの大将狂何と呼るあのゆゝんと言ふ良よ問しゝ神井鬼六進ミ出るゲ将軍も豫ようその名ハ知食ろうん渠ハ寄ふの副将軍刀野太郎時夏ありと告るを経任ふ驚く和殿の人と言ふを傳ふ景慕の思ひ已ゞく竊よ五頭平をゆて愚意をかよへ世既よ好を結びしゝ此度寄ふよりとハ言ふも怨敵のうひとなさゞ内應せるべくゝんと憑しく存ぜ。ゆるゲ士卒悞く矢を射ろけ刃をゆゞ元剰擒よせしハ慮外の失礼慚愧よ堪ゞり。舊交を忘ゞゝ許しゝへとうち勸解く聽くその傳を釋犯をのゆを携ゆて上座よ誘引へゲ鬼六矢藤五これを遠しく席を避不慮の合戦を賠詰ようろ時夏ハひろけく助命せるのゝ。その

管待等閑なるべし且愧且疑ひて賓席より著ぶ袋を被りし猫の如く額を叩頭を尻を卬くし逡巡をのゝきもれば經任遥に達六に指さして渠は何者ぞと問ふに時夏答へて某は腹心の家隷なりと答れば うち頷きて又達六が縛を釋放させて主の後方に侍らせつ。當下時夏も面くに挙る額の汗を拭ひ某豫て將軍の尊意をもて ぞるにあらざれども いかゝせん憖に擇ばれ副將の大任脱れがたく陽に武命に應じて況さべれ某戦ひに敗れうち負て既に擒にあり るを許さるのみにて賓主の礼をせらるゝ再生の恩知己の幸。何ぞ欺られはまさん用ひらるゝとあらば筋を断骨を折り犬馬の勞を盡さべし貳なくを誓を立て媚しべ經任ふて歡びて既にいるべくんば則ち幸ひに席を更めて勸盃せん。誘ふへと先に立て後堂に伴ひつ新衣裳をせして濡れ衣を脱更させ賓主の坐定まれば。准備をしてうけんと艶妖なる婢們十餘人ゆく盃盤を捧げ美酒佳肴を按排べく時夏に勸めて盃はあらゝとよりて順に遠らし。逆に返し既に半酣に及ぶに歌妓小声妙に歌ひ奏ぐる管絃は鄙ゆゑあれど趣あり仏國にありとは迦陵頻伽めきていと愛さし。浩処に年紀二八あまりなる白拍子水干に烏帽子しく扇を閃しつゝ舞せうこは經任ぶ妾なる陸奥一二の美人とおぼえし文字揚といふ遊婦なり時夏は既にその艶曲をせくに心耳を蕩し又この歌儛を観るに魂天外にあり文字揚が花の顔はみすゝ野の春も數なるべし又嫋やかなる柳の腰は安積の采女も及ざるべし文字揚儛ふに左に遶れば時夏が晴左にまり文字揚立て右に寄れば。時夏が晴右に在りこの時ゆゑに人はものいふをもて持る盃の

傾くを覚ぜ歌舞ハ三曲めく果しなべ經任ハ文字揚を召び果らせく。
をさく酌を執らせる程ハ時夏艶酊して泥の如し又彼刀野ゞ家隷矢塚
達六をも主の所用をうけ合ハれ近く間近く侍せくその饗膳主の
時夏ハ異あることなしかくて經任ハ時夏主從を誘引くゞ土庫ハ赴ちく。
金錢財宝の多紀をもんせく軍用ハ乏しかくぶるを示し又勝建〻ぬるる。
倉廩ハ趣く山の如く積上るる兵粮ハ数年の貯あるを示し又兵庫ハ
赴ちく武具矢種ハ富るを示し又衣倉ハ赴ちく。綾羅錦綉の多紀を
示せば時夏主從ハ観毎ハ嘆賞し往時六郡の主るし泰衡按察使の
富といふとも及ばぬ程ハ稱るかるし程ハその日も暮ハられば。
經任ハ燭を續せく夜燕を催し更闌く主客酔を盡し各臥房ハ
入るハ及びくなかも時夏を釣んるハ冬の夜長紀頃あれば寢寢の間ハ

せられとく彼文字揚を遣しられば時夏忽ハ望を足りく十二分の歓び
あり又文字揚ハ經任ゞ密意を沿るるのあれば飽ハぬでハ媚を献じく。
小鹿の角の束の間もさしとゞめ私語ハ時夏ハもく現を脱して身皮
なくハ體を合せん死なばもゞ日同穴ハ築らんとゞ契りる既ハして第
三日の曛昏ハ經任ハ時夏を閑室ハ招ちくいふるゞ志願空うるぐ。
和殿ハ對面せ一日ハもく捨ぐ紀思あり願ハ永く留りて富貴を共ハ
受なへるを鎌倉ハ帰参せるとも頼家暗弱ハく政事ハ親ハ特政
父子をさく外戚の威を逞くし黨を樹植を弄びて喜怒賞罰ハのゞ
この故ハ喜ぶとも功紀をも賞し怒るとも罪紀をも罰せり彼
暗君ハ仕へ彼賊臣の蔭ハ入るんハ石を抱ちく淵ハ臨て薪を負ハく
火ハ近つくよう特ハ危紀ハ有れどもかへり去んとすゞ強て

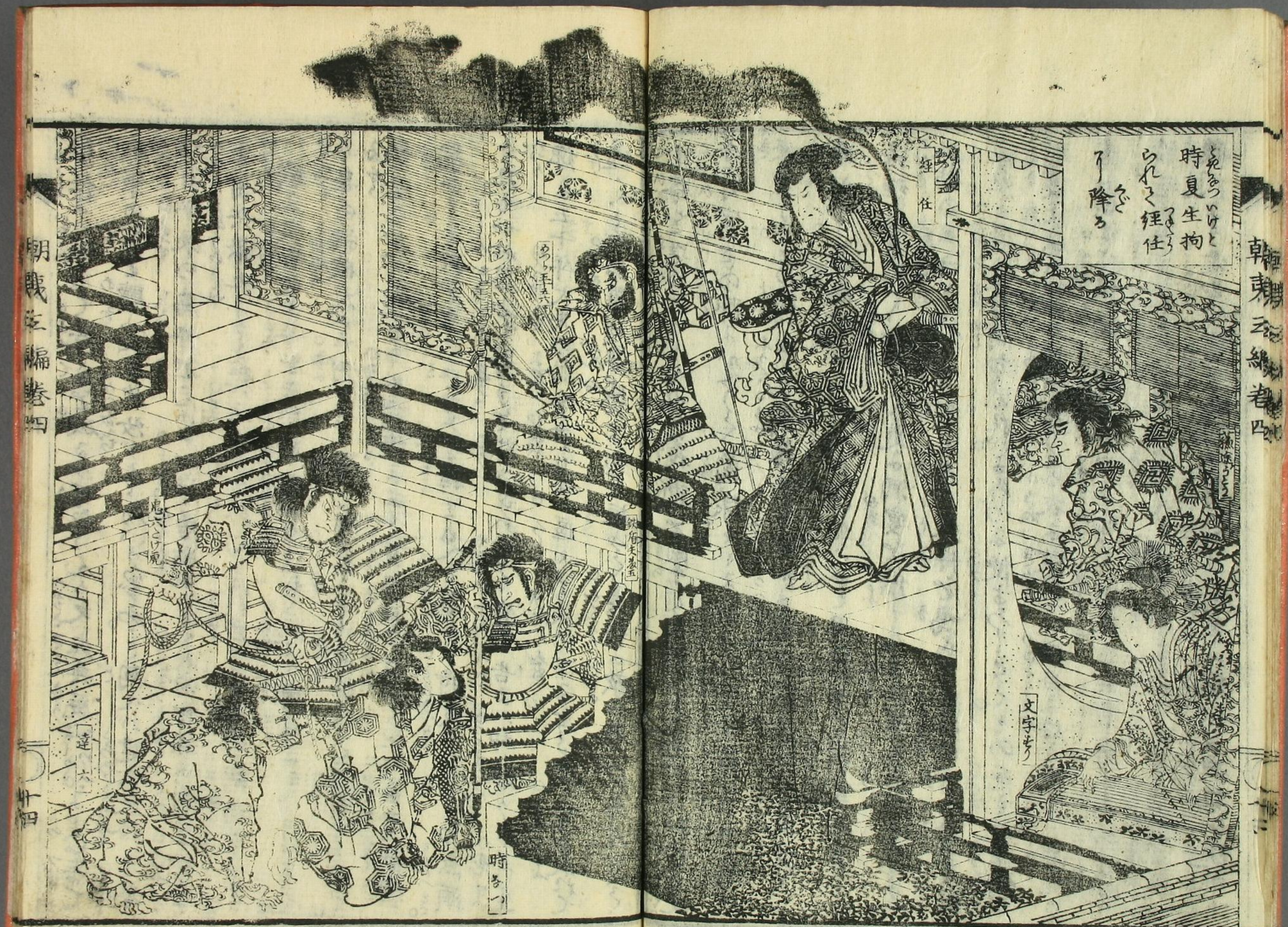
苗んとゆあるべし。抑經任不肖なれども厨川は義兵を起せしより戰へば捷攻おれば取る膽沢より北のそと外の濱は至るまで悉皆まつ有り。進てハ敵地を畧し退くハ自國を守り進退出没自由をなしうる加藤れは亦一術あり雲を起し風を呼び草木をもつて士卒とし瓦石を撲て牛馬とし在鎌倉の大小名貞を竭しく推寄来るともまれ只肩ともせずこれこれなへといひつゝ口は咒文を唱れば一象の黒雲經任が頭の上より天靡降りて暫時姿を隠しうり時夏ハ幻術は呆れ惑ひつゝあるそれ歌ひ通愛こそ妙術あるべし寔は將軍ハ天の作る英雄はこそをいまれ某故郷は妻子もあり誰が為は富を辞して鎌倉は還ることを願んや只いのまゝも君は仕へて死をもつて恩は酬ゆべし。疑ひなしとなんと經任術をかゝるく欣然として小膝を進めたゝんゆ義兼を擊とるるいと易うり和殿主從今宵寄るの陣みかてく箇様くは説へ明日義兼推寄せ来るべその時ハこそ箇様くと巨細は謀を密語バ時夏は感佩しこの謀究めく妙とあるべ異議なく領掌ちうし

經任はもく歡びく更は酒宴を催しうり折しもあれきのふの木枯の風吹暴れて木葉を飛し枝條を鳴らして物の音もゆるそ

ぐ紀は猶且宵間ありれバよろづは便よろしとくとその夜亥の左側は時夏主從ハ舊の鎧下なりる衣は被更く經任は辞し別れ出去んと

ちとそは文字揚ハ時夏が袂は携り泣沈くく霎時の名残を惜

うこれも亦丈夫のあるを釣んと忻る綸るべしかくく件の主從ハ後門より走出く寄るの陣へ赴く程は時夏ハ達六は彼謀を説示し


朝戦左編巻四
時頼
経任
文字若

経任は一味して寄るを破るが可かるんや又左典厩をいつわり実を告て敗軍の咎を贖ふべき欲ありいかゞと問へば達六沈吟して某項日平泉の為体を見るに士卒勇猛わるく大将智謀は長ずるに加るに軍用兵粮乏しくねば攻るとも落べくば君は寄るの副将として一戦は数百の士卒を失ひ賄擒はせられて逃て陣所へかへりて平泉の柵破れぬは何をもて功とせんや幸ひわるく異ることなく鎌倉へかへりぬとも本領は三千貫経任は役人と死は富貴歓樂疆なしこれをもてこれを攻るに櫛を比べと答ふる時夏主はうち点頭これも如此思ふに寄るを謀るすは易く実を告るは却難ふ人生は五十年犬馬の齢を貪りて区々たる人の下をもんや寄るを欺て逃へくば修羅が軍威はもく振ふく奥羽は敵はあるべんかくその由断を窺ひ経任を殺し柵を棄べ奥六郡はなが有べし。

ふや其所おぐるべくとも文字撮を柵は遺しおくべくこれ又寄るの陣はあるんや努此彼は暁られか秘は秘はと密語つ主従齊に直走してその暁るは鎮守府なる寄るの陣は立るべくく云こと嶋門けるこのとき摠大将義兼は臥房はあり時夏主従かう来れるはを突く先訪りく後は歓び驚く起出く衣裳を更ず入てく対面はる程は天は明ふ義兼は床九をとるく刀野生差やを是へくと招はるまば時夏膝行頓首しく おそるく進て近つ是某只管血氣は早りく軍令を用ひを敵の謀は當られく影の士卒を失ひ主従二人擒はせくく武恩を忍諸るおぞはこの辱はあへると顧れば面目あるもれとも禍福は糾る纏の如し始終の勝ことは勝あるは某擒は

せられし。故よ不憶便宜を図らう一挙しく経任を討滅さんと疑ひ
ず。といふを義兼安あへば。そんすしあざきさまとも和殿主従いろ
ろく輙く脱れ来つるとを問い時夏莞爾と笑ましられバしそのす
れ。某主従獄舎よ繋れ脱るべくもあらざりしよ。これを管る獄吏ハ
元来泉三郎忠衡が小卒ありし古主忠衡い泰衡よ殺れその父経任が
親弟任よ殺されう。あの故よふく経任を怨むといへども勢ひ已とを
切ぜ駈入られて。平泉の柵中よありといへり。ちをりく某を霸よ
憐むこと舊識の如しきのふ傷よ人あるをり時夏よ密語るやう。
られ翌の夜ハ和君主従を放遣るべし。寄るの陣へうへり去さらるべく
柵を攻させぬへこの柵西の城戸ハ嶮岨を頼く守兵甚をけ。一日暮
るべ火を放て西の城戸を開くべし。大軍其処ありうち入らば東ハ攻ぜ

ろく敗れつべし。かくく経任を擒よせんと袋の物を取るゞ如ん勇あら
まちかのかといふ某ぜく其許の謀住妙といへども主従脱去らば。
その咎必内廷よ及ぶんその身罪人と為ると誰ゞ火を放城戸を開ん
ぞつるゝと難せしよ彼人笑くこゝろ。
あるべうゝ友二人ありられ亦罪を脱るの謀あるよあらば陥むとこゝろ
説諭しつかくく昨の宵風ぜ暴くりつるよ紛れ獄舎を出奔と越境を
渉るくかう来わり哀れ御勢を向させく平泉を攻ぜ泉一方の攻りを
受取るく柵を接ぜ敵を鏖ゆし。先日早りく敗軍の怨を賞んゆ只
この一挙よひと真しやうよ告しゝハ頂の義兼欺れくその歓び大うゝ
あらば夫然るとゝハ寔よ天祐神助と吏成らばその軍功和殿第一
あるべしと叮嚀よ労ひてられハ當坐の勧賞ととく鹿毛の馬よ雲珠

鞍置るを牽立させく贈りしべ時夏へ拜し受く帷幕の下へ退却す。

中輯第廿八　平泉伊賀の敗北

假賢人の赦書

かくく足利義兼ハ老黨高階兵衛師勝糠田八作重正ホを招却
のせく敵ヨ内應のあれるるを説示し諸軍兵ヨハ時夏が脱れ帰
るるを告さを直ヨ進く泉川をうち渉し平泉の柵の前後れ城
と。稲麻の如く囲せく短兵急ヨ攻うるるれが賊徒ハ矢種を
惜ま差詰引詰射る程ヨ寄るハ些射ちまされ盾を被ぎく
閲却けり。案内知るるるれがこの日も時夏先鋒さうかてよ
ふ。あれば猶も大將義兼を欺くう功を諸軍ヨ譲ると称しく。
隊勢を牽く牛くと東門ヨ攻蒐れが大將義兼の一千餘騎ハ西の

城戸をそ攻うけるかくくその日ハ暮れども敵ヨ返忠のあれるを
のくく搦軍いふく囲を解び先陣挑ちべ後陣替り前あるも
殺るれば後れるるの死骸を踏越塀ヨ著りの突落されば立顕を
射く落を孰ヨ隙ハるりけり浩処ヨ柵中ヨ火光發く賊兵俄頃ヨ
騒動む事の紛れヨ内ようして西の城戸を開却しべ義兼ハ
佶く見く兵共進めと麾うち揮く後れしりのを駐立くその勢も
馬を乗入れるるれども敵出あハぞ是ハいふふと疑惑ひく退却よと
散動ほどよんえつ。大光ハ候滅く城戸ハおのづく破と鎮陰くと
ちく黒雲起り風ホ颯と吹暴れく石を飛し樹を倒せば寄ヨの
兵ハれヨ樸ちく死ぬるるの数十人士卒いふく途を失ひく同士を
ちく疲ど被り輾つ轉つ打擇せそが中ヨ高階兵衛師勝ヨ主を

守護しく処を去らじ。糠田八作重正ハ城戸の傍なる馬を乗もえ。人くなどして狼狽る城戸ハこゝなるものを力を勇しく打破りとく出ぶ、やこゝ聞れば声をあるべよ膂力あるものの三十人搦捕来つ辛して丹を打砕き扉を推つ一崩よ退き死ぬとゝ程よ忽然として耳辺の魏波天地を動し右るのくより鬼六鶏東二左るのくより五十五六矢藤五正面より賊主経任猛卒もゞく二千餘人四面八方より起立く矢を射うこと雨のごとく義兼を狙とめと異口同音よ呼つて當る隨よ砕倒せば暫くもの数を知らぬ屍ハ横りく葦を乱し血ハ流れく肩を浸せり吐嗟大将義兼も難れつゞくえゝを師勝重正命を限りよ防戦しく主を救ひやうゝ屈くよ走り出るを賊徒ハ逃ぬ脱さゞしく透間をく追蒐れば糠田重正踏留り近つく敵を撃殺して。

あゞくくハ禦ぐものくく数ケ所の深傷よ斃ひ竭く神井鬼六よ撃れよりくし程よ義兼ハ百騎足らをよ駆ぬれ十町ばかり延くるを東の城戸を陽攻せしカ野太郎時夏ハ兵勝駐立くその中く先を遮り留め義兼脱ぬ路ハ降参せと呼れハ義兼主従大死よ怒く恩よ致く極悪人天罰ぬひちくせんと敦圍あゝば及そうも振り出と嘯く砕立れば賊徒ハ颯と披死あハせ引包ぐく攻こうける。いとも烈し死戦ひよ寄るの士卒ハ過半斃れく義兼僅よ十四五騎路を棄く逃走れが時夏一騎味方よ先くち馬を急しく追懸くる程よ信夫荘司元晴が名代城戸三郎守詮いちゞあ時夏よ従ひく東門ハ向ひよ刀野が野心あるをえくとが隊兵を纏めく竊よ変よ備へしよ西の城戸の寄る敗れくとかりく。

鯨波よ起り雑兵の叫声ゆらるごとくぜえろう当下時夏べもが軍兵よ機密を告忽地備を建更しく迯る寄手を追蒐れば賊徒時夏を資んとく柵を開かく走出そう守詮ハせんもべかさ陽が同意れ

あり。もして時夏が後よ跟焦火影照らさせく十町あまり追ハ程よ。

廿一日の月出く皎くとしく白昼の如しとえれば敗兵十四五騎大将の前後よ立く江刺のくへ敗走ル間迥よ隔れども隈なき月の光夫。

隠るべくもあらざれば時夏ハ諸軍よ先ちち蓬しかへせとゆけう。

城戸三郎これをみく馬よ拍ル乗走らく賊軍を駈離れをや時夏よ近つく程よ弓箭刺めく声ちり立返賊時夏誰をう追ハ。

城戸守詮あるよあり箭一條受よとゆつくえるえる処を拝と射る。

矢来些遠ちれば袖隠の間より隅を射削ち時夏怒く些も

擬議せず馬の平首牽向ル馬ハ二の箭よ胸を射られて狂ひもゑぜ輾転び主ハ撞と反落さるく。

守詮態く寄せあハせく首を取んと進む処よ時夏が家隷

矢塚達六後れ走よ走り来つ薙刀をもて守詮が馬の足を薙

倒せば主ハ馬よ乗ゐぐり地上よ礫とそう伏ちう達六ハ遠間ゆく。

薙刀を晃しと掛んとそれば守詮ハ弓をもく受とゆ閃りと鞍を

乗ちゆちく再びかゑる薙刀を反かへし衝と入りく引組く揉倒

押へく索を掛ちゆる當下刀野時夏ハ甲冑くよ身を起しく。

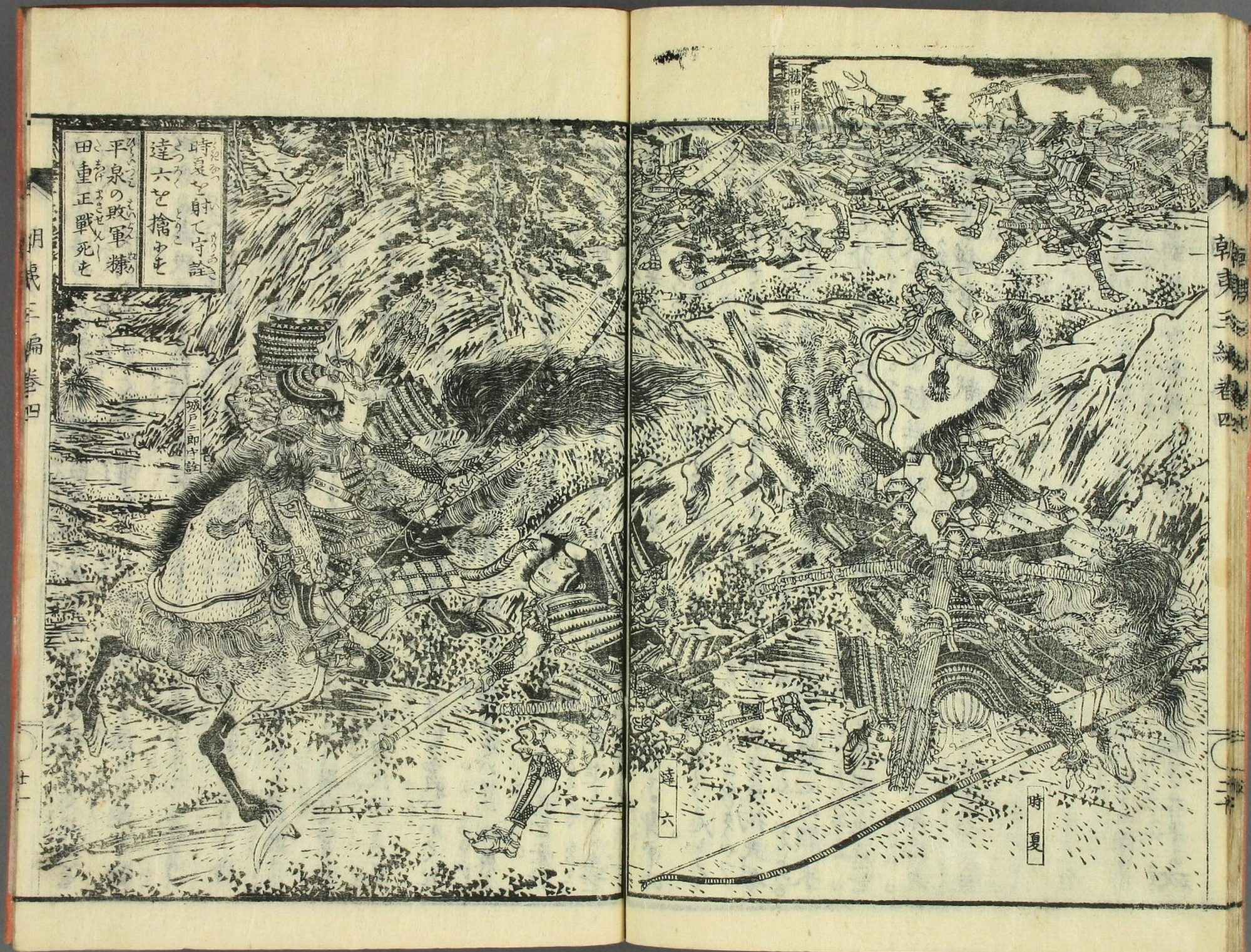
遥よえれば達六ハ守詮よ組れちゆかくてもいあざ味方ゐ賞ぞ。

守詮が軍兵のゑ間近く走来つ救ふべくもあらざるゑ間道を遶りて

迯去ちゆかりし程よ守詮ハ時夏を撃漏しく遺恨ゆちくおれ

どもゝ軍兵ハ二百ゟ足らず。目ゟあまる敵と挑こ戦ゟて。あまゝく陣歿せべきゟあらずとゝ。生拘を牽立させ大将の迹を慕ゆく泉川をうち渉せべこれゟ敵ハ追ざりゝる程ゟ義兼ハ鎮守府ゟ落とぐまり味方の兵を俟しゝべ天明ゝくあまゝ集會ゆの徳ゟ五百餘名ゝとゞ中ゟ城戸三郎守詮ハ隊の軍兵を一人の暫せず積時夏ゞ腹心の家隷矢塚達六を生拘来ゝく戦ひの趣を告ゟけるべ。義兼感悦斜ゆらず。軈ゝく守詮ゟ對面しゝく危急を救ゆる軍功を賞嘆し卿辺今度の働ゟ比類なし。荘司ゞみづゝゝ来會して先鋒ゟ進ゝるともこのゝへのゝあるべゝゝゝべゝゝれ慮足らずしゝく時夏ゟ欺れ家隷糠田重正ハさゝゝ士卒の陣歿半ゟ過ゝゝ彼時夏ハ利口ゟゆく奸智ありゝれゝゝぐるゟあゝぐれども渠ハ執權恩顧のゆゆ。

この故ゟ年来ゝれゟ関けられゝく竟遂ゟあゝゟ及べゝり。獅子身中の虫といべし。達六奴を拷問せべ彼奴ゞ伎倆ハ分明ゆゝんとく牽出しへと下知ゟ隨ふ守詮ゞ士卒四五人索を取ゝく生拘矢塚達六を牽出しゝ答を揚ゝく打懲らし主の刀野ゞ野心の顛末責問を大ゝくゆゝねば達六苦痛ゟ堪ぎしゝく時夏ゞ隠匿逆意を悉く首伏を第一ゟ往任ゞ部下の偷児早蠅五頭平ゟ相譚れ足利より鎌倉へ貢献ゆる金銭巻絹を畧奪せゝゝゆ赤貝の百姓苗四郎引太郎ホを砍殺しゝく五頭平を救ひ又五頭平を欺ゝく。八島室平ゟ牽遮し更ゟ吉見義邦を誣く往任一味のゝを告訴し義邦逐電ゝゟ及びて時夏みづゝゝこれを追蒐途ゟ五頭平ゞ支黨ゆる野伏ホを駈催して勝沢ゆく追著ゝれゞ媼子井平ゟ砍


朝倉三郎
時夏
達六
時夏を射て守註達六を擒ゆ
平泉の敗軍糠田重正戰死せ
城戸三郎
朝倉三編卷四

立られずくほねを沼遂げぞ賜藍玉院の弟子の女僧は拉られく芹平も
撃偏し伎倆の發覚んをを懼まく室平を病床は猛り五頭平を
獄舎は毒殺せりさは徑任と舊交あるをもく時夏は敵は生拘られう
れども還く尊信饗應せられ更は徑任は相譚れ逃かへりく
ありもして賊の為は詐の計を行ひぬ又義邦主従の逐電を薗様く
井平は箇様く義秀は箇様くことこの四人は罪あうしく罪人はあうし
流言させるるまでもそれその実を吐しくば義兼面色火のごとく
怒るる眼は血を沃ぎく平泉のくを疾視反賊時夏いうれば
如く毒悪あるれり彼奴を生拘く首を鎌倉は贈らるべ世の胡蹙は
なくんのを小勢ありとも推はせく勝負を一時は決もべしとく馬を牽け
兵どもと跳あがくく敦圍くそのくを老黨高階兵衛進と出く主を
諫め寡をもく衆は敵しがたく当然の道理を述くるを敵地
近く一圓国府へ引くくれ再び奥羽の軍兵を駈催しく
後日の征伐あるべしと辭を竭しく禁めしくば義兼力及ばして
軈く国府へ退たつ軍兵催促厳重なれども寄るいくくも負て
賊は破竹の勢ひあるべ守護郡司小戦慄れく催促は従はとかく
程は十一月はありしべ毎日は雪降積りて人馬の駈引不自
由し来春雪の解る比まぐ滞陣せん兵粮積くぞ義兼迷惑
至極しく竟は帰陣は一決し城戸三郎守詮ゆは軍功の賞と
名馬一匹を牽禄く式待してぞかへるかくて足利左馬介義兼は
十一月中旬は残兵七百餘騎をるく国府を發く月のをくは鎌
倉は泰著し執権時政の第はいあるく北條父子は對面し合戦利あ

ごとく時夏が舊惡逆心の為体又彼義邦廣光井平ホハ曩ヨ
時夏ヨ誣られく已てを始め逐電をくれど素より犯せる罪なれ
義秀が八島室平ホを授懲せ〻ハその友の為ヨせ〻の潔白の人な
べ死より又信夫莊司元晴が家臣城戸守詮が今度の働ハ彼とおく
此と飛く巨細ヨ告ると又いかうこい時夏が脱肱の癖者矢塚達六が白
狀ヨあるくちがめく邪正あられう。義兼不才短慮ゆて始終時夏ヨ
欺れ此度の大事を慫もう敗軍のおん咎ハ素より覚期のすれども。
今さら見参ヨ入らんと面ぜまとひへと恥を隱さば非を飾らど一五
一十を述べ〻ば時政ゆく呆れ果つもくとと〻く義兼の顔をの〻打
まもりつ肩揺揚く息を吻ホ。此ひ〻ゆ時夏が逆賊ヨ荷擔してこの
辱めヨあんとかれれば此度の敗北ハ貴所一身の越度ヨあ〻ば時政も

ホ不覚と彼奴が親照時ハ前婦の後弟なりしく〻ば憖ヨ憐愍の
誠が仇となりけらし所詮生拘達六をとゆく禁獄もぞきと又貴所の
褒敗ハ廣元ホと相諍ふくともらくも執達もべし病後の心労推察
せり退りて休足あゆへと叮嚀ヨ慰れば義時も亦情を告く頻ヨ
嗟嘆きろうかくく次の日新將軍頼家卿ハ時政廣元ホが
ヨ任せ征東使足利左馬介義兼を営中ヨ召登し凱陣の儀を
ものく見参の勸盃あり軍旅の勝敗を問ぜしく帰國の暇をあり
〻ば義兼ハ恩を謝し執権父子ヨ別を告く足利へ帰城し〻只
管ヨ愧悔へく病著頻ヨ再発し遂ヨ逝去の実えあり鑁阿寺殿と
法号ハ嫡男義氏家督う義氏の後巻和田合戦の條ハいえ。
この下ヨ詰かし間話休題足利義兼帰國の比北條江間義時ハ父

時政よ容語ゆう義兼敗軍の咎あるを。そゞ大人の壻ゆゑと誰こゝへ
ぞるものあるゝん又彼吉見義邦ハ蒲殿の子白塙丸なりゝ世よ隠れかゝ。
又媼子井平ハちゝめゝゞ家よ仕しめゝ主の旨よ違あゝゝて下野へ追
遣られゝゝゝどもさぜろ慇ゆるものあゝゞ又朝夷義秀とゆ猛者ハ出処
定らあゝゝざれども生れあゝゝの匹夫なりゝゝの人く時夏よ誣
られく骨相書をもて索られゝハ出あるゝ宛屈あゝゞや彼ハ遠く走り
深く隠れく刑戮を脱れしハ自他の幸ひゝゝゝく時夏主後ゞ罪を倡て
矢塚達六を由井濱よ梟首し義邦廣光井平義秀ハゞ罪籍ハ宛
ゝるゆう赦免せゝゝゝ趣を。國ゝへ徇させゝへかくの如く行ひてゞ大人の
政事訟を定るよ親疎貴賤の沙汰なし。世よ志ゝゝゝ民歓人歓ぶゝゝ
民後の後ふゝゝハ仇寡しゝゝ。安全の計策ゝ照時ゞ故をもて時夏ハ

この年来情を被ゆひしゝど。渠逆賊よ与せゝゝゝゞ彼よ負くよゝゞ。
彼ゞ我よ殺るゝ達六を梟首のゝゝ猶豫ゆゝゝゞゝゝゝのびくよ
諫しゝゝゝ時政ゝれよ従ひく達六を誅戮し義邦ハ四人の罪犯宛に
よゝく赦免のゝを國ゝ縣田舎おゞく残る曲あく徇させゝゝ信なる
ゝゝ儒仏の教誨善ゆハ善の報ひあり悪ゆゝ悪の報ひあり天運循環
ゆゝとゝゝハ暗君も暁ることあり奸宰も枉ゆハよゝゝ義時ゞゆゝ賢人ハ
身の利のゝよ揣るといへども併忠臣義士の誠を天神鑒ゝく今この恩
赦よあゝゝなゝゝゝ。案下某生再説修羅五郎経任ハゝひの隨ハ寄
てゝを破りく威勢ゝもく奥羽を動し世よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ縁故ハ
時夏ゞ不義の資よ成るゝのゝゝ亦忌ゝゝゝゝゝゝ初のごとくよ
欺待さゝゝ四天王ゞゞ亞よゝゝゝく絶よ一方の頭領ゝゝ又彼淫婦

文字揚は經任が愛妾なれども。時夏を釣んがよう要時その枕席をそ
めさせもしられ今は要ゆ刀野より往べくばと禁めるを蘇塗鶏東二
諫るゆう此度数千の鎌倉勢と一戦は驚走らせるを皆是刀野
太郎が功と拒軍何ぞ一婦人を愛惜しく信をその部下より失ひぬんや。
世間より女子多う文字揚一人より限るべくば只彼女子は初の如く時夏より
与へゆへさるとは恩を感じ情より引れてあるく用ひられんとを願ふべし。
りとの約を違へゆ恨を必変を生ぜん賢慮を旋しゆへと以ふ經任
あく頭をうち掉られは妾影あれども文字揚が如は汝が美人と
稱はるゆ。ゆつかゆとうち笑へば鶏東二又いふゆうまで聞ぬぞや。
信夫荘司元晴より一個の孫女あり其名を筐姫と呼ぶ傾くう青春二八の
うへより過ぎ沈魚落鳥閉月羞花の美人ゆく絲竹のあくべ詠歌のオ

傾ぶ。と人食いへり。賀美栗原玉造磐井の四郡今ゆく從ざるゆ。
只彼信夫荘司のみさばれ寄ゆの敗北已来膳を冷しをそんぶん
口よく利ものをゆく且試より筐姫を求く御覧ゆへう拒軍は義經の
あん子ありと称しゆへど信夫荘司が從ざれをを真とうるゆ寡し。
元晴拒ゆく筐姫を与るをを許さぶを又謀あり姫はゆく信夫荘司が
白髪首をも取りつべし賢慮いるゆど真実ぶゆく勸ぶ大妃より歓び。
微妙も讃るゆのうれ彼筐とゆんぶりを忘れうゆより鬼六
矢藤五は勇あありあれども才足らぬ甲乙と擇んより汝彼処へ赴くべし。
支度をせよといそぐせば鶏東二推辞氣色あくうけゆうひぬ某
彼処へ赴くとも十ゆく九は元晴決しくうけ引べくば。なれども下ぶ
彼処より到ると紀はその言語より就きその案内より就妃後日より謀を行ふよ

便ありその饋物ハ箇様〳〵又従者ハ如此〳〵と事こまかに注文し次の日
物よく整へ礼服して馬にうち跨り賊卒廿人に五荷の役爪を扛擔せ
高館を望ていそがせたり不題城戸三郎守詮ハ國府にて摠大将
義兼に辞しられ隊兵をひきゐて高館なる圓山の舘に帰陣し
合戦の勝敗時夏が逆心の支の趣矢塚達六が白状によりつぶさに義邦
以下の人々に罪なき事顕然たるよし自分の軍議異見なども元晴
義邦に告しかバ元晴ハさらなり吉見主従ハ寄手の敗北まで風声に落涙
物から今又時夏が逆謀を巨細に聞て遺恨に堪ざりしかども守詮が
矢塚達六を生捕しかばすり吾黨の寃枉忽ちに釋けて今こゝに天日を
見る事ハ三郎が賜なりとて義邦も廣光もその歡び大かたならざれバ主従
齊一席を起て守詮を再拝し義邦ハ帯たる重代の刀を取て

守詮に与へしかバ元晴も亦その功労を褒美して食禄を加増す。
かくて又義邦ハ元晴廣光とうち相譚ひ既に世間廣くなりぬ。
この処にあらんすを義秀にしられなバ信ありしとて恨られん彼ハ
今なほ旅にありとも越中なる稲向許消息せバ傳へ聞くことも
あるべし廣光彼処へ趣くべしとて心ざしたれ早けれども時既に玄冬の
最中なれバ北国ハ雪深く行客途を去あへず雪吹に撲れ雪
崩に埋られ死するもの多かるハ常にきくことなりしかバ難儀の時
なり春を待とも遅かはあらじと元晴只管制て遣らざれバ義邦もあらそはず。
心ならずもとゞまりしが老人の議に従ひて廣光を禁めたりといへども
十二月の朔になりしかバ駒形村なる田丸標吉ハ養母の忌果て後えど
めでたく領主の館に参りて義邦筐姫と婚姻の祝言を述畢りて黒木に

預られし沙金四十両を齎しく廣光より遞与せしなば義邦是を
実くらち笑ひ標吉が律義なる何ぞこの金より及んや。これ對面なべし
と元晴も由を告させ翁婿列座しく標吉を召迎著義邦
まづその忠孝を誉更めく件の沙金を賞禄よとらせ又時夏が逆謀
達六が白状の趣を告しらべ標吉ハ義邦の厄の釋んとなるを祝
しく沙金ハ家も固辞るを。さぞを不敬なるべしと廣光がいふよ
もべく受納めく拜謝せり。當下元晴舎笑く標吉郎これ汝を
ゆく駒形村の長とせし。他村の民を領移さんと豫ねてよりいへども。
大獻經任郡郡よりあり境を或るをりあるべかりしく民を
動しくさし吉見殿も世間廣くなりぬんよ汝とが館より留りて
この君より仕へよとし。ありれば駒形村をもて食邑より宛行ふものと本姓

馬籏より立ちて嗣忠と名告れり。これかるが二人の子共嗣信忠信が。
判官殿より仕へしし忠心より擬ひのをもてよと説示せば標吉
おもく感悦し賢息達の片名あぐぬいんハ分より過ぎ併望を
足り面目られよおもとせし且駒形の宿所より退去物よく取そのへてまりみ
んと答つく遠侍より退去く両老黨昌甫守詮より恩を謝し歓びを述。
駒形村へ還りけり。暫しく水草十郎城戸三郎ホ遠しく主のそとうへ
来くいのやう平泉の賊徒蘇塗鵜東二暴道と名告れるの經任が
使者と称しく美酒乾魚巻絹など影齎し主君より見参を乞ひ追
退けいん狄撃笛いん狄とひ元晴実く頭を傾け逆賊經任故あり
ちく使を遣し物を贈るハ実情より消よあるべし。ひら要害をうん為あるべしこれば
数ゆも足らぬ小賊ホが首取て何ぞせんこれ出會せハ臆ぬよ仕へう。

冠者主従ハ且く奥へ避ぬへきのみと呂べと居おゝまとりも飾らぬ威儀
凛然驚く氣色ハおゝ〻〻現支の為体ぶひみあゝ使者のれば義邦も
廣光も阽をかゝ〻次の間へ避けく様子を窺ふ程ふ執継の若黨ゞ。
てゆみく運ぶ贈物ハ白木の臺ふ白銀百枚練絹五十反綿五十屯美酒
十壺乾魚の折櫃十五前処陜まで扛居〻〻ゝる程ふ蘇塗鞦東二
暴道ハ若黨だゝふ道守れく過る廊下も長袴稜取おゝ〻〻八方ふ
酢る眼光人を射く一癖あるべゝ両魂佩こゝ〻〻ゝる長剣ふ歩の運びを
刻鞋身を切るゞゝ死寒風ふきのふの雪の素書院怯ゞ臆せゞを
進ゝ来つ元晴ふ長揖しく東面の坐ふ著ぬ畢竟主客の問答
如何をハ次の巻ふ解分るをゝく〻〻ん。

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之四終

早稲田大学図書館
011888007298